Okayama Shoka University

『岡山商大論叢』（岡山商科大学）
第40巻第1号　2004年6月
Journal of OKAYAMA SHOKA UNIVERSITY
Vol. 40　No. 1　June 2004

《論　　説》

『ドンビー父子商会』における時計の意義

中　原　敬　介

The Significance of the Clocks in *Dombey and Son*

Keisuke Nakahara

序

チャールズ・ディケンズの7番めの長編小説『ドンビー父子商会』（*Dombey and Son*）は、1846年10月から1848年4月にかけて、月刊分冊の形で発表された。この作品は、前もって周到に準備されたプランに基いて全体が構成されている点、様々な出来事が散発的な挿話ではなく、一貫した主題を発展させるようにプロットのなかに編み込まれている点、「海」や「鉄道」のイメージが、これまでになく意識的に象徴として活用されている点において、ディケンズの初期の作品とは一線を画しており、彼の後期作品群の円熟を予感させるものである。

上達しつつあるこのような創作技術を駆使してディケンズが描くのは、人間そのものであると同時に、社会でもある。作家になる前、議会報道記者として活躍していたディケンズは、『ボズのスケッチ集』（*Sketches by Boz*）で小説家としての人生を開始してからも、ジャーナリストとして養

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

われた目を社会に向け続けた。彼は、救貧院、寄宿舎学校といった施設のもつ問題を、次々に発表する作品上で痛烈に批判した。こうしてジャーナリスト作家としてディケンズが迎えた1840年代の中ごろは、イギリス各地で鉄道が盛んに建設され、めざましい勢いで社会全体に変化の波が押し寄せていた時代である。『ドンビー父子商会』執筆当時、ディケンズが新しい社会現象としての鉄道に注目していたことは、物語のいくどかの転換点で、鉄道やその敷設工事の場面が詳細に、また象徴的に描かれていることから明らかであり、この点は多くの批評家が指摘するところである。しかし、ディケンズはこの変化の時代を描くにあたり、鉄道の背後にもうひとつ別のメタファを用意しているのだ。

ディケンズの他の作品と比べて、『ドンビー父子商会』には、「時計」が登場する場面が非常に多い。著作『時間の歴史』を通してジャック・アタリは、人間の歴史において、それぞれの時代の計時具とその時代の時間観とは、常に社会の変革に立ち会い、決定的な影響を与えてきたことを指摘しているが、[1]『ドンビー父子商会』の作品世界においても時計はこのような役割を果たしているのであろうか。本稿では、計時具の発達の歴史の中で、19世紀中葉のイギリス社会に機械時計が与えた影響力と、その力を利用する、或いはそれに抵抗する人間の姿を『ドンビー父子商会』の中に探ってみたい。

時計のもたらす権力

中世以前は日時計、燃焼時計、水時計が時を知る手段だったが、1300年頃になって歯車が登場し、中央ヨーロッパのドイツ語圏で機械仕掛けの時計が製作されるようになる。当初は家庭用ではなく、大聖堂の塔時計が中心だった。それはただ時を告げるという目的以外に、算術、幾何、天文、音楽といった知の要素を凝縮し、ヨーロッパ大陸の権威を象徴するもの

1　ジャック・アタリ著、蔵持不三也訳、『時間の歴史』（原書房、1986）

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

だった。時間厳守は国王の礼儀となり、時計を所有することは、高貴な身分と直結した。17世紀になっても、時計は貴族階級のシンボルだった。

19世紀の到来と共に、時計の持つ意味、時間の源泉に対する認識のしかたは根本的に変化する。それ以前の時計は、例えばリッテンハウス（David Rittenhouse）の太陽系儀のように、天体の不規則な運行や、季節によって変動する一日の昼夜の時間を忠実に再現するきわめて精巧な自然界の模倣装置であった。しかし、新しい機械時計は時と自然の繋がりを絶つものだった。

> 19世紀において時間は、自然や神に根を持つ現象から、機械すなわち時計にもとづく、いわば勝手に決められた抽象的な量にとって代えられた。[2]

> 時刻法において構造の転換点となるのは、昼と夜がそれぞれ12等分される不均等な時間（不定時法）から均等な時間（定時法）へと、一日の区分方法を変えたことである。自然界の現象に合わせて伸びたり縮んだりしていた時の歩みが、無機質で等間隔で区切られた時間に取って変わられたことは、時が自立し、社会を管理する道具となっていくことを意味した。[3]

それまでずっと生活は、地球と太陽と月の周期にしたがって秩序付けられていた。ところが機械仕掛けの時計は昼夜平分時の導入を強要し、昼と夜を、日の出や日の入りに関係なく均一な24時間からなる時間枠へと統合したのだ。「社会を管理する道具」としての時計は、まず教会に取り付けられたタウン・クロックとして市民の宗教生活を管理した。[4]しかし、とりわ

2　マイケル・オマリー著、高島平吾訳、『時計と人間』（晶文社、1994）13。
3　ゲルハルト・ドールンファン・ロッスム著、藤田幸一郎訳、『時間の歴史（近代の時間秩序の誕生）』（大月書店、1999）337。
4　オマリー、『時計と人間』40。

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

け産業革命の進む19世紀のイギリスにおいては、工場の時鐘が従業員の時間を規定し、事業主たちに、権力を与えた。[5]自分の時計によって24時間の中から労働時間を任意に切り取り、それを労働者に強要することで彼らをそれに従わせることは、経営者が彼らの時間の概念をみずからに引き寄せて彼らを支配することを意味していたのだ。『ドンビー父子商会』において、ソロモン・ギルズ、カトル船長、フローレンスの３人は、朝は西に、夕方には東へと、満ち引きする潮のように定刻になるとひとびとが移動するさまをそれぞれ目撃する。この人の流れは、時計によって支配されたロンドンの都市労働者たちの姿なのだ。

時計のもたらす権威が一般市民に浸透したことをオットー・マイヤーは、次のように指摘する。

> 時計が称賛されたのは、その規則正しい動きが見た目に美しいせいもあるが、そういった規則正しさのおかげで周囲に対する権威を獲得したことや、人間の諸事にリーダーシップを発揮したことも原因だった。こうして時計は、人間生活に秩序をもたらすあらゆる権威のシンボルになった。[6]

『ドンビー父子商会』の中でも、時計の保有が権力に直結するさまは、女傑マックスティンガー夫人がバンズビーと無理やり結婚するという一見些細なエピソードにまで見られる。教会へとバンズビーを引っ立てる彼女の胸には、彼の時計がこれ見よがしにぶら下げられている。道中、バンズビーの友人カトル船長は、彼に逃亡を説得する。

> 'Come!' said the Captain, nudging him with his elbow, 'now's your time! Sheer

5　オマリー、『時計と人間』55。
6　オットー・マイヤー著、忠平美幸訳、『時計じかけのヨーロッパ』（平凡社、1997）60。

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

off! I'll cover your retreat. The time's a flying … Now or never!'

Bunsby didn't then, and didn't ever; for Mrs MacStinger immediately afterwards married him.[7]

時計を奪われたバンズビーは、もはや飛び去っていく時を捕まえることができない。マックスティンガー夫人は、彼の時計と共に彼の「今」を奪い、結婚を強制することで男の権威をも奪っているのだ。

ドンビーとカーカーにとっての権力

『ドンビー父子商会』は、尊大で裕福なシティの商人ドンビーが先代から受け継いだドンビー父子商会を中心に展開する物語だ。ハンフリー・ハウスは『ドンビー父子商会』の舞台はこの作品が書かれたのと同じ1840年代後半であるとしている。それと同時にハウスは、ドンビーのことを、"a pushing eighteenth century merchant"[8]と呼び、彼が前の時代の生き残りであることを正しく指摘する。ドンビーが体現するのは、父権的、家父長的「意志」である。商会においては社長である彼の意志がすべてであり、彼は、周囲の家族、部下達に、常に自分の意志に従うことを要求する。また、彼は自分の息子ポール以外のものに商会を継がせるつもりはない。ゲルハルド・ジョゼフが "by patriarchal custom it is through the son that the father affirms his identity and extends his power over the future"[9]と述べているように、家父長制社会においては、長男に財産や地位を継承させることが父親にとってすべてであった。しかし、1837年の遺言法の制定により、世襲財産制度は廃止され、世襲制はすでに時代遅れの産物になっていた。ドンビーの世襲に対する固執は、彼が古いタイプの家父長であることを示し

7　Charles Dickens, *Dombey and Son,* Everyman Dickens (London : Everyman, 1997) 823. 以下、引用は基本的にこの版を用い、頁数のみを示す。

8　Humphty House, *The Dickens World*, (London : Oxford University Press, 1942) 137.

9　Gerhard Joseph, "Change and the Changeling in *Dombey and Son*", *Dickens Studies Annual,* vol. 18, 186.

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

ているのだ。

ドンビーの古さは彼の周りのいたるところに見られる。生まれたばかりのポールの乳母として雇われてドンビーの自宅を訪れたポリーの、家具、調度類に対する感想は“old–fashioned and grim”であり、彼女にとってドンビーはまるで“a lone prisoner in a cell, or a strange apparition”（24）である。また、初めて商会に出勤したウォルター・ゲイの目に留まったのは、“a precious dark set of offices”の中の“a lot of cobwebs”と“an almanack”（38）である。ドンビーは自分の殻と前世紀という独房の囚人、幽霊であり、時計もなく、蜘蛛の巣のかかった事務所の時は静止している。そもそも暦は天体と自然にもとづく農耕をつかさどるものであり、機械式時計の出現以前の時を思わせる。時といえば、ドンビーが自分の懐中時計を見ることはほとんどなく、彼は自分の娘フローレンスの成長、商会の実質的な発展といった、時のもたらす変化を意に介していない。ドンビーは商会と共に産業化社会の最先端をいくようにみえながら、彼自身は時の流れの中で過去に静止しているのだ。

マイケル・オマリーは、1830、40年代の伝統的な父性的権威の衰退が前に述べた新しい時計の出現と無関係ではないことを指摘する。

> 工場システムが手工業生産という、より伝統的な方式を圧倒するようになるにつれて、親方ないし事業主と従業員との父性的温情主義の関係は崩れていく。工場生産のもとでは、従業員はもはや、自分達が個人的に、いや、場合によっては親密に知っているもののために働くのではない。
>
> その権威に連動した時間感覚は、新しい秩序の前に崩れ去ろうとしている。
>
> 家父長的権威の没落と共に始まったのが、時間というもの、そしてそれに伴う時計というものの観念における変化なのだった。[10]

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

ドンビーの家父長としての君臨が自己満足的なものに過ぎず、彼の周囲全てに浸透しているわけではないことは、彼の使用人たちの不遜な態度をみれば明らかである。しかも、『ドンビー父子商会』の中に「新しい秩序」は既に出現している。それは、ドンビーの側近である支配人ジェームズ・カーカーである。

ドンビー父子商会の実質的な業務をしているのはこのカーカーである。彼が作品の途中に突如として現れること、商会内における彼の存在が、記憶力に優れるフローレンスの幼少時の記憶に全くないことは、彼がそれまでにない新しいタイプの存在であるということを象徴的に表わしている。カーカーの考え方は、先に述べたドンビーの特徴と著しい相違を示す。作品の後半まで明示されないが、彼はドンビーの家父長的権力を嫌悪している。彼は、初めからドンビーのふたりの子供たち、フローレンスとポールに嫉妬しており、ポールによる商会の権力世襲を嫌う。しぶしぶながらドンビーがウォルターを商会に雇用したのはソロモン・ギルズとの縁故のためであるが、カーカーにはこのような父性的温情主義はない。ジョン・カーカーはかつて商会の金を横領しようとしたことがあるが、発覚後も当時の社長であったドンビーの父の情けで解雇を免れた。しかし、カーカーはこの実の兄に対して容赦しない。こうした点で、ドンビーとカーカーが対照的であることは明らかだが、このカーカーはどのような手段を使って権力を手にするのか。

カーカーと時計

カーカーが何を自分の権力の拠り所とし、どうやってドンビーの力を封じようとしているかは、彼が初めて作品に登場する、ドンビーとの会話の部分に現れている。将来ドンビー父子商会を継承することになるドンビーの息子ポールの成長について話す中でカーカーは言う。

10　オマリー、『時計と人間』53。

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

'Time flies!'

'I think so, sometimes,' returned Mr Dombey, glancing at his newspaper.

'Oh! You! You have no reason to think so,' observed Carker. 'One who sits on such an elevation as yours, and can sit there, unmoved, in all seasons ? hasn't much reason to know anything about the flight of time. It's men like myself, who are low down and are not superior in circumstances, and who inherit new masters in the course of Time, that have cause to look about us. I shal have a rising sun to worship, soon.'[11]

続いて社長が、その日の予定として、3時と3時45分に会議が入っていることを口にすると、カーカーは彼の記憶力のよさに大袈裟に驚いてみせる。

'Catch you forgetting anything! … If Mr Paul inherits your memory, he'll be a troublesome customer in the House. One of you is enough.'

'You have an accurate memory of your own,' said Mr Dombey.

'Oh! *I*!' returned the manager. 'It's the only capital of a man like *me*.' (169)

最後の部分から、「記憶」こそがカーカーにとっての武器であることがわかる。実際、彼はしばしば「記憶」によって過去から呼び起こされた情報をおのれのために最大限に利用する。ドンビーへの復讐を実行するに先立ち、彼は商会の過去と現在の取引状況をつぶさに調査する。(608) ドンビーの妻イーディスとの駆け落ちという彼にとっての至福の時は、過酷な上司のもとでの過去の苦しい見習い期間の賜物であると彼は言う。(729)

---

11 Charles Dickens, *Dombey and Son* (Harmondsworth : Penguin, 1985) 240. ディケンズは、『ドンビー父子商会』を月刊分冊形式で連載するにあたり、頁数の関係から、多くの箇所を校正原稿から削除している。ペンギン・クラシクス版は、そのうち約70個所を取り入れている。この引用はそのうちの一つであり、解釈上極めて重要と思われるので、この箇所に限り、この版を採用する。

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

さらに、彼は、ドンビーについての過去の経験から未来を見通すことができる。(603) カーカーは「記憶」によって時をひとつの流れにすることで自らの力としているのである。一方、逆に、ドンビーやポールがその武器を手にすることが自分にとっては「厄介」であることを冗談めかしてもらしている。さらに引用の前半部では、社長の偉大さを称賛する口振りの裏で、ドンビーが「時の流れを意識する」ことも否定している。となると、カーカーの力が、彼が思うようにドンビーに及んでいるとすれば、ドンビーの意識の中で時の流れは分断され、彼の「記憶」は、その力を奪われるか、歪められるかして汚染されているはずである。

ドンビーが18世紀的な支配的家父長であり、自分の息子に後を継がせることが自分にとっての全てであることは既に述べた。彼が病的であるのは、息子の自然な成長を待つことができず、促成栽培的に、ポールを成人させようとする態度である。

> Therefore he [Dombey] was impatient to advance into the future, and to hurry over the intervening passages of his [Paul's] history. Therefore he had little or no anxiety about them, in spite of his love ; feeling as if the boy had a charmed life, and *must* become the man with whom he held such constant communication in his thoughts, and for whom he planned and projected, as for an existing reality, every day. (90–91)

誕生の瞬間から、ポールが将来自分の共同経営者になるものと彼の運命を先決し、彼に子供時代があるなどとは信じず、一刻も早く彼が大人になるような教育を施す。無論、そのようなことは不可能なのだが、ドンビーの頭の中には、父子商会の完成しかない。その後に控えているであろう自分の死、父子商会の「父」の消滅すら眼中にないのだ。あるのは目標とその達成のみであり、そこへの経過、その後の末路には、何らの関心も示さない。ドンビーの意識の中で、時は流れていない。むしろ、彼が望む未来の

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

一点で停止しているのだ。このような時の流れの分断は、過去の記憶をも毒す。ポールの出産後間もなく他界した妻ファニーの思い出は、固定された彼の未来像の中に埋没する：“Thence he passed to the contemplation of the future glories of Dombey and Son, and dismissed the memory of his wife, for the time being, with a tributary sign.”（21）ドンビーはカーカーにおだてられるがままに自分の家父長としてのアイデンティティーが安泰であると信じ込み、時の流れを意識することはないという忠告のままに、連続性を失った時の中で病んでいるのである。“heavy gold watch–chain”（53）はドンビーのトレードマークだが、彼の時計本体を握っているのはカーカーである。ドンビーは文字どおり時計に鎖でつながれた一種の奴隷なのだ。

カーカーにとって、機械時計は不可欠である。もはや自然と切り離された産業社会の中で、時の連続性を武器とする者は、時計の命じる声に従わなくてはならない。カーカーがたびたび周囲の人々から punctual の性質を指摘されているのは偶然ではない。彼においては、punctual であることは、時を支配することを意味するのだ。しかし、punctual であることは、必ずしも時を支配していることを意味しない。『ドンビー父子商会』では、むしろ punctual な人物が機械時計の示す時に支配されていることの方が多い。ドンビーが息子ポールを送るブリンバー博士の寄宿学校はその一例である。半年ごとの休暇前に行われるパーティーは常に午後７時30分に始められる。日々の日課も、再三繰り返されるブリンバーのセリフ‘Gentlemen, we will resume our studies at seven tomorrow.’が示すように規則的で、単調きわまりない。このような時間厳守の教育は、各々の製品の価値がそれを生産するのに必要な労働時間によって測られるようになった、機械時計が閑暇を厳しく制限する工業化社会において、卒業生が、いかなる条件下でも労働を受け入れられるよう訓練するという意味においては有益といえるかもしれない。しかし、こうした環境は、生徒たちの創造の衝動を奪い、その日々の生活は、“The studies went round like a mighty wheel, and the young gentlemen were always stretched upon it.”（159）と表わ

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

されているように、単なる苦行に他ならない。ここでの“wheel”は、直接的には刑車のことだが、時計の歯車を連想させる。ブリンバーの学校のホールには“a great clock”があり、この時計のたてるチクタクという音は屋根裏部屋まで聞こえる、校内で唯一の音であるとされている。機械時計によって支配されたこの学校は、ドンビーが望んでいるように、子供を成人前に一気に開花させる巨大温室にたとえられる：“a great hot–house, in which there was a forcing apparatus incessantly at work. All the boys blew before their time … Nature was of no consequence at all.”（139）ここは、自然界から時を切り離すことになった機械時計が、自然な時の流れと時がもたらす子供たちの心身の成長とを歪めている世界なのだ。

このような環境の中に投じられたポールがこの大時計に惹かれることは興味深い。ある日、彼は、この時計が修理人によって解体されている光景に出くわす。

> [T]here was something the matter with the great clock ; and a workman … had taken its face off, and was poking instruments into the works by the light of a candle! … Paul asked him a multitude of questions about chimes and clocks : as whether people watched up in the lonely church steeples by night to make them strike, and how the bells were rung when people died, and whether those were different bells from wedding bells, or only sounded dismal in the fancies of the living. Finding that his new acquaintance was not very well informed on the subject of the Curfew Bell of ancient days, Paul gave him an account of that institution ; and also asked him, as a practical man, what he thought about King Alfred's idea of measuring time by the burning of candles ; to which the workman replied, that he thought it would be the ruin of the clock trade if it was to come up again. In fine, Paul looked on, until the clock had quite recovered its familiar aspect, and resumed its sedate inquiry. (188–9)

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

これは、修理に伏されることによってこの時計が停止し、その力が失われたひとときである。ポールは修理人にいくつか時計にまつわる質問をしている。注目すべきことは、その質問の中に、機械時計に関するものがないことである。歴史的に見て、教会の鐘時計は確かに機械時計が統治者に権力を与えるようになってからのものではある。しかし、彼の関心は、機械にではなくて、死そのものに対して向けられている。彼は、自分が死んでこの世を去った後に起こること、そして残された人々の様子を知りたいのだ。ポールは、機械式時計以前の時計について修理人に逆に教えている。彼は、中世ヨーロッパで防火のため日没時に撞かれていた晩鐘や、アルフレッド大王時代の燃焼時計のことは既によく知っているのだ。燃え尽きてしまうロウソクは、限りある生を実感させるものとしてポールにとっては近しい存在といえる。それに対して、修理することによって動き続ける機械時計は、無限を約束してくれるかのように思える。修理を終えた時計の以前と変わらない繰り返される「落ち着いた問いかけ」：‘how, is, my, lit, tle, friend?’は、彼にいつまでも「今」を問い続ける。死を強く意識するポールにとって、大時計のもつ意味は、彼が彼自身に対して問わなくてはならない問題なのだ。入学後のポールは、周りの大人達から“old fashioned”と評されるが、これは、ブリンバーの学校の促成システムとそれを支配する時計によって彼の時の連続性が奪われ、彼が早すぎる死へと近づきつつあることを示している。ところが彼は、大時計の語るまやかしの無限によって目をくらまされ、機械時計の及ぼす力に気付くことができないでいるのだ。

ソロモン・ギルズは、海軍将校候補生の木像を看板にしているロンドンの船具商である。ウォルターの優しい叔父であり、常にフローレンスに力を貸すこの善良な人物も、punctualでありながら、機械時計が支配する世界の犠牲者となっているのだ。大英帝国の発展を支えた要素の一つに海洋貿易がある。遠く離れた異国との貿易を成り立たせるためには、航海の安全が保障されなくてはならない。かつて、海洋上で正確な経度の計測によ

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

り船舶の正確な位置を把握するには絶え間ない天体観測が唯一の頼りだった。しかし、独習で時計製作技術を体得したスコットランドの大工ジョン・ハリスン（John Harrison）が高精度の機械時計、マリンクロノメーターを18世紀半ばに開発してからは、海上においても、機械が人間と自然の繋がりを絶つことになる。『ドンビー父子商会』が執筆されたころは、まだクロノメーターが天体観測を不必要にするところまではいってなかったが、航海術を支える必需品であったことは確かだ。シティの真ん中で経線儀、晴雨計、望遠鏡、羅針盤、海図、六分儀、四分儀、クロノメーターといった航海用具を売るソロモンは、ある意味で、イギリスの通商の屋台骨を支えていたのである。ドンビー父子商会の成功が海洋貿易によるものであったことを考え合わせれば、夢想家カトル船長の“The Captain is as satisfied of the Midshipman's importance to the commerce and navigation of the country, as he could possibly be, if no ship left the Port of London without the Midshipman's assistance.”（839）という考えは、あながち絵空事（a fiction of a business）ではないのだ。ソロモン自身常にクロノメーターを身につけており、“If Uncle Sol had been going to be hanged by his own time, he never would have allowed that the chronometer was too fast, by the least fraction of a second.”（258）とあるように、その正確さを疑うことはない。彼にとって、クロノメーターは太陽よりも信頼性のあるものであり、：“rather than doubt which precious possession, he would have believed in a conspiracy against it on the part of all the clocks and watches in the City, and even of the very Sun itself.”（36）時計は“unimpeachable authority”（258）なのである。しかし、彼はこのような機械時計信仰のため、時代の趨勢に過敏になり、自分と自分の商売のやり方とが“behind the times”であることを苦にするようになる。彼がウォルターを商会に入社させるのは、自分の甥が「時代に乗り遅れぬように」（40）するためである。ソロモンが「商会がいつかウォルターのものになるかも」（44）というウォルターの未来を先決するかのようなカトル船長の夢想にいとも簡単に同調し、ポールに対するドン

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

ビーと同じ夢を抱いてしまうのは、ソロモンが機械時計の生み出す時に支配されていることを表わしている。

長年ドンビー父子商会に勤めるモーフィンは、産業社会を支配する時がもたらす問題をよく理解している。彼は、“habit”という言葉を多用し、自分も含めて多くの人たちが“creatures of habit”（761）と化していることを“It's this same habit that confirms some of us, who are capable of better things, in Lucifer's own pride and stubbornness.”（716）と指摘する。彼によれば、ドンビーが「魔王のようなプライドと頑迷さ」に凝り固まっているのはhabitのせいなのだ。さらに彼は別の箇所で、別の言葉でhabitを説明する。“We go on in our clockwork routine, from day to day, and can't make out, or follow, these changes.”（460）ここでは、habitを生み出すものとして時計がクロースアップされている。時計の反復的機械運動、テンプ、歯車、文字盤の針の動きは、確かに自然界の円環的時間を想起させる。しかし、既に述べたように、機械時計の生み出す冷徹な円環運動は、人為的（不定時法）であり、自然界の円環とは異なる。この時計によって日々を惰性で送る人々は、時計による「偽の円環的時間」にからめとられて、時がその自然な進行と共にもたらす変化に気付かなくなる。反復的習慣の輪の中で時の流れを見失った彼らは、ドンビーや、ブリンバーの学校や、ソロモンのように、一足飛びの未来という幻想の虜になるのだ。

このように見てくると、カーカーはまるで人間ばなれした存在のように思えてくる。機械時計の生み出した人為的な時を自在に操り、自らはそうした時に惑わされることなく、それどころか、周囲の者たちの時を分断し、まっしぐらに突き進む。機械時計が航海術にもたらした恩恵については先にふれたが、時計によって力を与えられ、イギリスの近代化に大きな役割を果たしたもう一つの立役者に鉄道がある。「時」、「時計」という観点からみると、この鉄道とカーカーとの間に顕著な類似が浮かび上がる。

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

鉄道の化身カーカー

海上交通で用いられたクロノメーターは、グリニッジ時に合わせられた。グリニッジ時はイギリスの海運国としての優位性を象徴するものだったのである。ただし、当初グリニッジ時が使われたのは海洋上のみだったのであり、これをイギリス国民全体に浸透させたのは、広まりつつあった鉄道だった。

東西に伸びる国土を持つアメリカほどではなかったにせよ、安全な鉄道の運行のためには、時間の統一は不可欠だった。イギリスでは、時間の統一は1840年頃個々の鉄道会社が独自に企てた。各会社が自分の路線にそれぞれ標準時間を導入した。[12]標準時間に合わせられた時計は毎日几帳面に路線上のすべての鉄道関係者のもとに届けられ、彼らは自分の時計をそれに合わせた。時間に対する正確さを求め、それを美徳とする点において、カーカーと鉄道は共通しているといえる。

グリニッジ標準時がすべての路線に通用する鉄道標準時として採用されたのは、ディケンズが『ドンビー父子商会』を執筆していた1848年のことだった。鉄道の時間がイギリスで一般市民の標準時となるのは1880年のことだが、40年代の後半においても標準時に対する人々の反応は激しかった。

> この方策は当然ながら多くの反対論を招いた。「鉄道の越権行為」だという非難もあれば、地域の標準よりもグリニッジ時を優先させると「全能の神の力を奪ってしまう」ことになる、との不満もあった。[13]

それぞれの地域は日時計を使って測定した南中時刻を基点に標準時を決めていた。経度が異なる町の時刻は当然ずれていたのだ。つまり、機械時計

12　ヴォルフガング・シヴェルブシュ著、加藤二郎訳、『鉄道旅行の歴史』（法政大学出版局、1982）57。
13　オマリー、『時計と人間』86。

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

が普及してからも、彼らは自然に、太陽に、そしてその場所だけに密着した時を生きていたのである。グリニッジ時の導入は、彼らの宗教観を揺るがすものだった。ユダヤ教とキリスト教の伝統の中では、時は常に神のものだった。「創世記」によると、神は光と闇を分け天を動かすことによって時間をつくった。ひとびとは時間を神と自然との関係として経験していたのだ。それに対して、時を恣意的で勝手に変えられるもの、商業的な便宜によって規定されるものという考えに基づくグリニッジ時は、自然をくつがえし、神の権威に対して人間のそれをとって代えさせる恐れがあったのだ。ここでも、時計の文字盤は権威を生み出している。鉄道とカーカーの類似はこれに留まらない。鉄道は、さらに、その直進性によって、人間を自然から定離させる。

鉄道は、切通し、鉄道堤、トンネル、高架橋で地形を裁断することで一直線に伸びる鉄の道を獲得した。馬車と街道は風景空間の中に織り込まれていたが、鉄道はむしろその中を突き抜ける。それまで風景の自然な起伏に身を摺り寄せていた街道を馬車で旅していた旅行者が、特にトンネルの中で、風景の喪失感を感じたであろうことは容易に想像できる。

ヴォルフガング・シヴェルブシュは、鉄道が旅行者の知覚に及ぼした影響を次のように説明する。

> 鉄道は発射体の威力を振るって、自然を貫通する。時間と空間の抹殺（annihilation of time and place）とは、それまで独裁的に力を振るってきた自然空間に鉄道が侵入するさまを表現する、19世紀初期の共通表現（トポス）である。[14]

抹殺されたものとして体験されるのは、伝統的な空間および時間の連続性である。この連続性は、自然と有機的に結びついていた昔の交通技術

14　シヴェルブシュ、『鉄道旅行の歴史』14。

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

の特徴である。昔の交通技術は、旅をして通過する空間と模倣的関係にあったので、旅行者には、この空間を生き生きとした統一体として知覚させたのである。ベルクソンの言う持続（durée)、道を通って一つの村から他の村へ要する時間は、客観的な数値ではなく、時空の主観的知覚である。[15]

「時間と空間の抹殺」という観念は、この新しい交通手段が獲得した速度に由来する。鉄道が出現する以前の最速の旅行手段は郵便馬車だった。しかし、鉄道がまっすぐなレールによって獲得したスピードはその比ではない。この天候に左右されることもないやみくもなスピードは、旅行者の「空間および時間の連続性」を奪う。ディケンズ自身、フランスでの鉄道旅行の経験を彼が編集する週刊誌 *Household Words* にレポートしているが、"I am never sure of time or place upon a Railroad."[16]との感想は、まさにこの感覚である。

時を自然から切り離した時計によって力を得、punctual で、後退することなく直進し、自分の牛耳る商会が "Dombey and Son know neither time, nor place, nor season, but bear them all down."（508）と豪語するカーカーは、鉄道機関車そのものである。彼は、ドンビー、ブリンバー、ソロモンたちを乗客として乗せ、彼らの時を分断しながら驀進しているのだ。

では、『ドンビー父子商会』の世界の中では、人は鉄道の生み出す偽の円環的時間の中で、時の流れを失ってしか生きられないのか。途切れることのない時の流れが、鉄道によって必ずしも破壊されるものではないことを、トゥードル一家が証明している。ロンドン近郊の自然を破壊していく鉄道の敷設によって彼らの住んでいた Staggs's Gardens は姿を消す。その代わりに出現するのは、"There was even railway time observed in clocks, as if the sun itself had given in."（214）とあるように、時計による時の支配であ

15　シヴェルブシュ、『鉄道旅行の歴史』52。
16　Charles Dickens, "Railway Dreaming" *Household Words*, vol. 13, 325.

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

る。この「時」は、太陽との対比で明らかなように、自然界のサイクルとは別個のものである。しかし、トゥードル一家には、自然界的な円環時間が流れている。

トゥードル家とドンビー家の繋がりは深い。トゥードル氏の妻ポリーは、生まれたポールの乳母となる。その縁から、長男ロビンはドンビーによって the Charitable Grinders' School への入学を許される。しかし、彼はそこでの虐待によって堕落し、カーカーのスパイと成り果てる。彼がカーカーの馬に付き添う態度 "a demonstration of punctuality" (609) は、彼が無意識にカーカーの世界に同化していることを示すといえよう。このロビンを例外として、トゥードル家には産業社会の時が流入していない。子供が日々、時の進行にしたがって成長していくものだというポリーの妹ジェマイマの考えは、ドンビーのポールに対する姿勢と対照的である。亡くなったファニーが眠る土は、「どろんこの小さな種が、きれいな花や、草や、豆や、ほかにも色んなものになったりする温かい土」(26) だとフローレンスを慰めるポリーの言葉は、農耕的円環の時を思わせる。トックス嬢は血縁こそないが、この一家との親和性は明らかである。彼女は初めドンビーの妹の友人としてドンビー家の友人となり、ファニーの死後は、自分がドンビーの後妻となる可能性を思う。しかし、この考えは野心に満ちたものではなく、無垢な夢であり、彼女自身もドンビーの世界に毒されることはない。後に彼女はトゥードル家の子供たちの教育係となり、ロビンを立ち直らせもする。そのトックス嬢がいつでもボネットに "old weedy little flowers. Strange grasses. Sometimes perceived in her hair" を付けていることは、彼女が一家に自然界からの影響をもたらしていることを示唆している。

鉄道の出現によって彼らの住居がいったん破壊されているだけに、トゥードル家の人たちの持つ時間感覚は、鉄道のもたらす時に対抗できるものとして位置づけられているといえる。トゥードル家が、産業社会の時に対して聖域となっているのは、女性を中心としたその家庭のおかげであ

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

る。1830年代から世紀半ばにかけて、家庭の女性のための手引書が、セアラ・エリスたちによって数多く出版された。家庭の外の公的領域で働く男性のための待避所を自由競争の原理から隔絶した家庭内の私的領域に構築するという女性の役割を説く家庭イデオロギーによって、女性は宗教と自然法則を通じて時間の権威を再確立し、そのことによって家庭の外に広がり、いまや戸口をしつこくたたいている新しい時間観から秩序を作り出しているのだ。トゥードル氏は、機関車の火夫として鉄道の世界に日々接しているが、カーカーの家に住みこんでしまうロビンとは反対に、毎晩この家庭に戻っている。そうすることによって、彼は家庭の提供する正しい原理に基づいて自分の時間を組織化できているのだ。

鉄道によるカーカーの死の意味

いまや神の権威に取って代わろうとする、鉄道機関車に代表される機械時計による産業化社会の進歩、発展は終わりを知らない。水晶宮での万国博覧会で誇示されるように大英帝国には発展あるのみなのだ。もちろん、カーカーの計画にも終わりがない。公金を横領し、商会を破滅に追い込み、自分はドンビーの妻イーディスと駆け落ちしたばかりか、彼の前にはシチリアでのイーディスとの享楽の日々が待っている。カーカーの死はこのような永遠の発展が不可能であることを示唆しているといえようが、彼が鉄道機関車によって轢き殺されるという事実は、いったい何を意味しているのだろうか。

最終的にカーカーを機関車の迫るレールの上に追いやるのはドンビーである。彼の追跡は激しい。ドンビーは、単身ロンドンの貧民窟を訪れ、そこで妻の駆け落ち先を聞き出すと、即刻、海峡を超えてフランスに渡り、カーカーを追って再びイギリスに戻る。自らのプライドをもかなぐり捨てたかのようなこのドンビーの様は、かつて商会の実務を部下に任せきり、自分は天上人として君臨していたころの彼のそれではない。少なくとも、カーカーの勧めるままに時の流れに対して超然とし、父子商会の成立とい

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

う未来に安住していたころの彼ではなくなっている。彼が停止していた望ましい未来の時は、ポールの夭折によってむなしく失われた。“the impotence of his will, the instability of his hopes, the feebleness of wealth”（265）を痛感した彼は、再婚したイーディスに絶対服従を強いることで、自分の「意志」を再確立しようとする。その時彼がまっさきに利用する手段が、権威としての時である。

> Mr Dombey was resolved to show her that he was supreme. There must be no will but his … he determined to bend her to his magnificent and stately will … ‘There is no time like the present, madam. You mistake your position. I am used to choose my own times ; not to have them chosen for me. (542)

結婚後の最初のディナーパーティーでも、時間厳守を彼女に言い渡す：Mr Dombey’s sending his compliments to Mrs Dombey, with a correct statement of the time（492）ドンビーはイーディスの「時」を拘束することで、彼女に対する権威を保持しようとしている。自身の体面を保つためとはいえ、ドンビーはカーカーと同じ力を持ち始めているのだ。さらに、ドンビーには時を待つ姿勢も生まれている。カーカーへの復讐を急かすバグストック少佐に対して、彼の援助を求めるのは、駆け落ち先の情報が得られてからだとドンビーは言う：‘I shall put myself in your hands when the time comes. The time not being come, I have forborne to speak to you.’（691）ポールに対してそうだったように、一気に未来を求める態度はここには見られない。獲物を狙う猫のようにじっと機が熟するのを待つカーカーのようなドンビーがここにはいる。カーカーは、自分と同じ力を手にした男によって死に追いやられるのだ。鉄道を体現するかのようなカーカーの鉄道による最期は、産業革命下で起こった厳しい自由競争の縮図といえよう。

カーカーの死は、それまで周到だった計画に、すなわち自分が信じてきた直線的時間に終わりが見えた時に始まるといってよい。駆け落ちの相手

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

イーディスは、ディジョンのホテルで、自分がカーカーの情婦に堕ちるために夫の下を去ったのではないことを告げて、逃亡する。その直後に聞こえるのは、２人を追ってきたドンビーが激しくドアをたたく音である。かろうじてドンビーとの対面を免れたカーカーは、夜行馬車を飛ばしてイギリスへの逃避行に出る。この時まず彼の念頭に浮かんだのは、“The clash of his project for the gaining of a voluptuous compensation for past restraint”（729）とあるように、ドンビーのもとでのそれまでの苦しみに対する代償を得る計画が挫折したという意識である。これは、過去を元手に現在、未来を構築していくという彼の生き方が根本的に揺らぐ瞬間である。この時、彼の中の時は混乱し、崩壊する。

> It was a fevered vision of things past and present all confounded together ; of his life and journey blended into one. Of being madly hurried somewhere, whither he must go. Of old scenes starting up among the novelties through which he travelled. Of musing and brooding over what was past and distant, and seeming to take no notice of the actual objects he encountered, but with a wearisome exhausting consciousness of being bewildered by them, and having their images all crowded in his hot brain after they were gone. (743)

これまで蓄積させ、利用してきた過去は現在との繋がりを失い、一気に彼の現在に混入している。カーカーの時に対する支配の喪失は、彼の最期まで続く。イギリスへと海を渡ったカーカーは、鉄道で目的地へ向かう途中、駅のそばで宿を取る。この時、彼は自分の懐中時計が停止していることに気付く。止まった時計が人生の終わりを表わすことは、数々の迷信の示すところであるが、『ドンビー父子商会』でも、時計の停止は持ち主の死や破滅を表わしている。ウォルターがカトル船長に語る海洋探検家の逸話でも水死した船乗りの時計は死亡時刻を示しているし、質屋ブログリーの店に陳列された時計は元の所有者の困窮を物語る。止まったカーカーの

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

時計も、彼の機関車による轢死を暗示しているが、それ以上に彼の場合は、機械時計に頼ってきた彼の直線的時間の敗北を示しているのだ。

機械時計を失った後のカーカーは、その死の直前まで、時計の歴史を逆行していく："How long he sat, drinking and brooding, and being dragged in imagination hither and thither, no one could have told less correctly than he. But he knew that he had been sitting a long time by candle–light."（746）時の経過の感覚を失ったカーカーにそれを教えるのは溶けたロウソクの長さであり、これは燃焼時計といえる。かつて、陽光の射しこむ事務室でひとり仕事に励むカーカーの姿は、日時計にたとえられていたが："he basked in the strip of summer–light and warmth that shone upon his table and the ground as if they were a crooked dial–plate, and himself the only figure on it."（289）これは、機械時計の本性を隠してドンビーを太陽と崇めるふりをしたカーカーの姿をあらわす比喩表現だったといえる。しかし、最期の日の朝、カーカーを迎えるのは太陽であり、その光の中で、彼はまさに日時計と化す。

> So awful, so transcendent in its beauty, so divinely solemn. As he cast his faded eyes upon it, where it rose, tranquil and serene, unmoved by all the wrong and wickedness on which its beams had shone since the beginning of the world, who shall say that some weak sense of virtue upon Earth, and its reward in Heaven, did not manifest even to him? If ever he remembered sister and brother with a touch of tenderness and remorse, who shall say it was not then? (748)

「崇高」で、「神々しいまでに厳か」な太陽、「天地創造以来」人間の諸悪に動じない太陽という描写は、神と、神が創造した自然に支配されたキリスト教的時間を思わせる。ここに見られるのは、季節のある時間のサイクルを生み出す真の円環的時間であり、人を自然と切り離し、habit の輪の中に落としいれる機械時計の生み出す人為的な偽の円環的時間ではない。これは、機械時計に支えられた直線的時間に対する、真の円環的時間の勝

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

利である。鉄道によるカーカーの自滅的な死が示しているのは、彼が体現してきた、終わりなく直線的に伸びていく時間の中で絶えざる自己実現を目指すブルジョワ的精神のはらむ危険性なのだ。さらに、流れていたはずのカーカーの時の問題点も明らかにされる。つまり、彼の「時」の連続性の欠陥である。

「一抹の優しさと後ろめたさと共に」カーカーに「妹と兄のことを」思い出させることで、太陽は彼の誤りを慈悲深くも教えている。商会で確固とした地位を築きつつあるカーカーには、脛に傷を持つ兄ジョンが依然として商会内にいることは、出世の妨げとなる可能性があった。彼はいつでも兄と、兄を追ってカーカーの下を去ったハリエットとを避けてきた。カーカーにとって、2人は消してしまいたい過去だったのだ。「記憶」は彼にとっては唯一の武器だったはずである。しかし、彼が大切にしていたのは、自由競争の社会で勝ち抜くために都合の良い、選択された過去だけであり、彼は、不利な過去からは目を背けてきた。自分にとって苦痛となる過去をも否定せず、過去の全てを思い出し、現在のために生かすという姿勢は、ディケンズの他の作品にも見られるが、『ドンビー父子商会』においては、既に述べた聖域としての家庭に守られた人たちの中に見られる。

ドンビーとの結婚という儚い夢に敗れたトックス嬢は、「無益な後悔」“unavailing regret”（513）にひたらない。彼女は、ドンビーの屋敷でのつらいはずの過去をも、満足の気持ちで振り返る：“She only thought … that she had passed a great many happy hours in that house, which she must ever remember with gratification.”（514）破滅したドンビーの家政婦という落ちぶれた境遇にポリーを赴かせるのは、「過去の恩を忘れるな」“I shouldn't allow of your coming here, to be made dull–like, if it warn't for favours past. But favours past, Polly, is never to be forgot.”（802）というトゥードル氏の信念である。彼らの時の流れには、切れ目がない。

母親と死に別れ、息子と、息子による商会の継続にしか関心のないドン

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

ビーを父親に持つフローレンスには、聖域としての家庭がない。父親に対して終始変わらぬ愛情を抱くフローレンスも、一度だけ誤りを犯す。彼女は、イーディス駆け落ちの知らせに逆上したドンビーに殴られて彼の下を去る。彼女は、この記憶を自分から消したいと願う。

> … but as if the last time she had seen her father, had been when he was sleeping and she kissed his face, she always left him so, and never, in her fancy, passed that hour. (757)

フローレンスは、自分がこれまででもっともドンビーの心に近づいたと思われる過去の時点で父にまつわる記憶を停止させ、最悪の記憶を葬ることで、彼を許そうとする。フローレンスと駆け落ち同然の結婚をするウォルターもまた、彼女の過去に関して同じような考えを持っている。ウォルターは彼女と共に中国へ発つ前にドンビーへの手紙をしたためる。その中で、彼は、自分の人生の大きな責務は、「彼女の過去の悲しみの記憶を消すこと」"to cancel her remembrance of past sorrow"（778）と言っているのだ。しかし、過去を忘れて許すことが実りのないものであることは、イーディスの例が示している。彼女は、ドンビーとの結婚前夜、それまで自分を結婚市場の商品として育ててきた母親スキュートン夫人に対して過去を忘れて許すという："My lips are closed upon the past from this hour … I forgive you your part in to–morrow's wickedness. May God forgive my own!"（420）イーディスは、"I can tell my fortune for myself."（368）と、ドンビーにも負けない自尊心をもって運命と戦う宣言をする。しかし、ディケンズは、過去を現在に結び付けようとしない彼女が未来を見据えることを許さない："My way henceforth may lie－God knows－I do not see it."（626）

過去を抹消しようとするフローレンスの胸には、父親による殴打の跡が醜く残る。その mark は、過去が現実だったことの印として彼女を苦しめ

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

続ける。フローレンスが過去を認めてドンビーを許したことは、帰国して父のもとを訪れた彼女が、mark のあった胸に彼を抱くことで示される。となると、フローレンスの過去に対する態度は１年近い旅の間に変わったことになる。その道中の出来事に関してテクストは多くを語らないが、彼女とウォルターの荷物の中にカトル船長から譲り受けた時計があったことは見逃せない。

カトル船長はいつでも巨大な銀の懐中時計を身につけているが、この時計はその精度において極めて不正確な代物である。ドンビーの下を去ったフローレンスを介抱する際、彼は、自分の時計に対して語りかける。

> 'Put you back half–an–hour every morning, about another quarter towards the afternoon, and you're a watch as can be ekalled by few and excelled by none.' (644)

マレイ・バウムガーテンは、カトル船長の時計を産業化以前の「時」を示すものと位置付け、"This world of leisurely time, linked to the inns and coaching world of *Pickwick* that Cap'n Cuttle evokes, brings a gentle laughter." と述べている。[17]確かに、カトル船長の時計は、不正確という意味では、産業化以前の遺物といえる。しかし、『ピクウィック・ペーパーズ』(*The Pickwick Papers*) が時代の趨勢から隔絶した田舎をその舞台とし、いわば無時間の世界であったのに対して、これまで述べてきたように、『ドンビー父子商会』は機械時計の生み出す新しい時間が支配する世界である。この世界の中で、カトル船長の時計はフローレンスに何を語るのか。朝30分、昼前に15分調整しなければならない彼の時計は、進み方も一定ではない。さらに、彼が時計を合わせるのは一日のうちで２回のみである。こうしたことは、カトル船長が自分の時計を時刻を知るために使っているので

17　Murray Baumgarten, "Railway / Reading / Time : *Dombey and Son* and the Industrial World" *Dickens Studies Annual* vol. 19, 68.

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

はないことを示している。それでも、彼は時計のネジを巻き続ける。つまり、彼にとっては、時計の針が何時を指しているかはほとんど問題ではないのであって、時計が動き続けていることが大切なのだ。カトル船長の時計が示すのは切れ目なく流れ続ける時である。それは、現在、過去、未来が断片化することなく、連続体を成した時なのだ。フローレンスとウォルターは旅のあいだにこの時計を使うことで、カトル船長からの無言のメッセージを受け取ったのだ。

さらに、カトル船長の時計を「遅らせよ」という指示に注目したい。『ドンビー父子商会』の中で、進みすぎる時計には、もう一つドンビーの時計がある。作品冒頭、ポールを出産した後、ファニーが死に向かう場面で、医師ペップスとドンビーの時計の音は、あい争うように速くなるように聞こえると描写される。これは、ポールが速く成人することを望み、後継ぎの出産という役割を終えた、ドンビーにとては家具同然のファニーを死に急き立てるというドンビーの心情の比喩表現である。当時のフローレンスにとって父親という存在は、まさにこの“a very loud ticking watch”(5) そのものであったとされる。ドンビーの長期不在中、彼女が父親に対する愛情を示そうと真っ先に思いついたのは、“a little painted stand for his watch”(310) を作ることである。この態度は、フローレンスの、ドンビーの「時」に寄り添う姿勢と言える。実際、ポールの一足飛びの未来しか頭にないドンビーと同様、幼いフローレンスの心には、いつの日か父の愛情を勝ち得るという根拠のない希望しかない。ドンビーに対してそうであったように、機械時計が支配する世界は、時の連続性を喪失させるという影響を、間接的にフローレンスにも及ぼしているのだ。貿易商人とその妻として機械時計が支配する世界で生きなくてはならない2人は、ドンビーのように静止した未来に生きてはならない。時計を「遅らせれば比類なきものになりうる」というカトル船長の言葉は、そのままこの2人に対する警句となっているのだ。彼らはこのことを旅の間に実践する。それは、クロノメーターに命を預ける洋上の旅であり、時計が支配する帰国後

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

の本土の模擬空間である。彼らのその後の成功は、彼らがカトル船長の忠告を理解したことを示しているのだ。

結　論

以上述べてきたように、『ドンビー父子商会』でディケンズは、産業化の進む19世紀半ばのイギリス社会における機械時計によって時を支配する者の台頭と、それがはらむ危険性とを描いていたといえる。

ドンビー父子商会は、自らの「意志」のみを拠り所とするドンビーを社長とする前世紀的な体制であった。この作品が書かれた当時のイギリス社会において機械時計の普及と共に伝統的な家父長的権威が衰退していったのと同様に、商会におけるドンビーの支配は、機械時計によって時を支配するカーカーの出現によって根底から覆された。自然界から切り離された時計が示す時に従うと共にそれを支配し、一方向に伸びて行く時を体現するカーカーは、産業革命の象徴である鉄道機関車そのものであった。こうした直線的時間に翻弄される人たちが多い中で、家庭の中に自然な円環的時間を構築する者は、その人間性を保つことができた。機関車によるカーカーの轢死は、新たに出現した自由競争社会の厳しさを表わすと共に、直線的時間が内包する問題点を指摘するものでもあった。カトル船長の時計は近代社会の中で生きていくすべを教えるものであり、その教訓を手にしたフローレンスは、機械時計が支配する世界で犯しがちな時の連続性の喪失という彼女の唯一の過ちを克服することができたのだ。

「時」という観点において、『ドンビー父子商会』は、ディケンズの創作の歴史の中でどのように位置づけられるのか。時代に密着した作品である『ドンビー父子商会』が描くのは、未来への不安をはらみながら変化、発展していく「現在」である。「過去」はトゥードルたちの家庭の中に、自然な円環的時間のかたちで残存しているに過ぎない。この「過去」は、時代の変化のもたらす悪影響に対抗できる唯一の手段として、一種のノスタルジアをもってディケンズによって賞揚されているといえよう。過去を

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

肯定する姿勢は、この作品以前のディケンズにおいては珍しいものではない。『オリヴァー・トゥイスト』(*Oliver Twist*) は、出自が明らかになることで、主人公がそのアイデンティティーを回復する物語だ。ここでは過去は掘り起こすべきものであり、見出された過去は好ましい結果をもたらす。『ハンフリー親方の時計』(*Master Humphrey's Clock*) の主人公と『バーナビー・ラッジ』(*Barnaby Rudge*) のジョン・ウィレットは、共に時の流れを無視し、それに逆らい、平穏な過去に安住しようと試みて、最終的に罰を受ける。時の流れが過酷なものであり、人はそれに抗うことはできないという考え方は、ディケンズが『我らが共通の友』(*Our Mutual Friend*) にいたるまで持ち続けるものである。しかし、いずれにせよ、ハンフリー親方やウィレットにとって過去が好ましいものであったことは間違いない。

概して肯定的にとらえられていた過去が作中人物たちを責め苛むようになるのは、『ドンビー父子商会』とほぼ同時期に執筆された『憑かれた男』(*The Haunted Man*) 以降である。この作品には、その最後の言葉 "Lord, keep my memory green." が示しているように、時の連続性を保つことの重要性という『ドンビー父子商会』と同じテーマが見られる。両作品のあいだの類似性を指摘することは容易であり、過去に取り憑かれた主人公レドローの原型をドンビーに見ることも可能ではあろう。しかし、この作品に続く小説群の登場人物たちに対する過去の呪縛の厳しさはドンビーに対するそれの比ではない。ディケンズの後期の作品では、現在を完全に支配する過去にどのように対処するかが一貫したテーマとなっている。『荒涼館』(*Bleak House*) においてはジャーンディス対ジャーンディス訴訟事件が、『リトル・ドリット』(*Little Dorrit*) ではマーシャルシーでの獄中生活が、『大いなる遺産』(*Great Expectations*) のハヴィシャム嬢にとっては過去の婚約不履行の件が、『我らが共通の友』ではジョン・ハーマン殺人事件が、登場人物たちに取り憑く。これらの作品において、過去が現在を左右するさまは様々な手法で表現されているが、『リトル・ド

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

リット』に着目してみたい。ここでは『ドンビー父子商会』で示されたメタファが発展的に使用されているからだ。

『リトル・ドリット』においては、過去の先例が権威の形を取って、社会機構だけでなく、あらゆる階層の人たちの現在をも支配する。本論では特にふれなかったが、『ドンビー父子商会』のピプチン女史も、自分の権威を保つために先例をおおいに利用する人物である。さらに、『リトル・ドリット』では、こうした過去の力は、「時計」と「円環」の比喩を用いて一貫して表わされている。円環をなした時が現在を毒するというこのような見方は、本論でも指摘したように、『ドンビー父子商会』のモーフィンにその起源を求める事ができる。機械時計の奴隷となった者は、反復的習慣の輪の中にからめとられ、時がその自然な進行と共にもたらす変化に気付かなくなってしまうというのがモーフィンの考えであった。ただし、これら２つの作品のあいだには、円環的時間が人々に及ぼす影響の結果において違いが見られる。『ドンビー父子商会』では、円環的時間の犠牲者が見るのは、たとえばドンビーが立派に成人し、自分の共同経営者となった息子の姿を思い描くように、その人にとって好都合な未来像であった。ディケンズ作品の歴史の中では、『荒涼館』のリチャード・カーストンが、このような姿勢を受け継ぐ最後の人物である。『リトル・ドリット』では、円環的時間の中で生きる人たちに、未来を楽観視する事は許されていない。過去の呪縛から逃れられない彼らは、宿命論的諦観に取り憑かれるしかないのだ。

『ドンビー父子商会』はディケンズの小説の中で明から暗への転換点となる作品とみなされる。時に対する考え方、とりわけ過去に対する態度の変化が、作品全体の雰囲気を悲観的なものにしていった要因である事は間違いない。『ドンビー父子商会』においてディケンズは「現在」に目をむけ、その「現在」を支配しつつある機械時計が生み出す新しい時間観を検証した。その中で、彼の心を最も引きつけ、その後の彼の創作の方向性を決定付けたのは、カーカーの体現する、未来に向かう直線的時間ではな

NII-Electronic Library Service

Okayama Shoka University

く、また、トゥードル家に残る昔ながらの自然な円環的時間でもなかった。これらは、時という観点から見た場合、この作品の中で中心的な位置を占めているが、ディケンズは、未来の発展にも、ノスタルジックな過去にも確信が持てなかったように思われる。彼が発見したのは、あるいは見出しつつあったものは、機械時計の出現が間接的にもたらした悪影響だったのだ。そこに彼が見たのは、本論では偽の円環的時間と呼んだものに支配されて日々を習慣と惰性で生きる人たちの姿、過去によって束縛されて変化に気付かない人たちの姿だったのだ。

NII-Electronic Library Service